
でいあ・my・プリンセス

黒羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいあ・my・プリンセス

【コード】

N1984P

【作者名】

黒羽

【あらすじ】

私は王女様。

舞踏会の日、魔王を倒して国を救った勇者様と結婚するつもりだったのだけど……

突然現れた来客のおかげで（？）、しばらく私は勇者様と婚約しないで済んだんだけれど……？

***親愛なる私の花嫁へ* (前書き)**

こんにちは*

とても寒くなってきましたね。

私、黒羽もケータイを手に布団から出られない日々が多いです。

出られないというより出にくいのですが……。

…さて、今回は温かなファンタジー物(?)を書かせていただきました。

連載小説形式なので、更新は遅めですがよろしく願います。

どうぞ最後までお付き合い願えたらと思います*

* 親愛なる私の花嫁へ *

今日は舞踏会の日。

私のお父様が突然そう言ったから。

私のお父様は、この国の王様。

…それで、私は王女様。

自覚はない。

王女様だからって気取る気もないし、着飾ろうなんて余計思わない。

でも今日はただの舞踏会じゃない。

よく知らないけれど、この国を乗っ取るうとしていた魔王を倒した勇者様を城に招いてもてなすつもりみたいだった。

…それに、もう一つ理由があつて。

私のお父様は、勇者様と私を結婚させるつもりで居るらしかった。

私は別に嫌ではなかったし、勇者様に少し興味があつたから、お父様の誘いに素直に返事をした。

だから、いつもみたいに地味なドレスを着ていくわけにもいかなかった。私はお母様を買って頂いた新しいドレスを着た。

時刻は夜の8時。

そろそろ舞踏会が始まる頃だった。

それから、私は舞踏会の会場に使われている部屋に向かった。

* o n e t i m e s *

舞踏会の会場は、とても綺麗に飾られていた。

親戚の伯父様や伯母様も、舞踏会に招かれていたみたい。

私は会う人会う人に、会釈を返す。

その中に、きらびやかなスーツを着ていない男の人を見つけた。

きっと、勇者様なんだろう。

外見は勇者様なんだけど、中身はそうでもなさそうな人だった。

「こんにちは。」

私がそう挨拶すると、勇者様は真っ赤になって消え入りそうな声で挨拶を返してくれた。

戦いには慣れてるのに、女性には不慣れな勇者様。

…なんか、可愛い…

そのままお話が出たかったのだけど、あまり長話に付き合わせるのは、はばかられて私は勇者様から離れた。

* t w o t i m e s *

私が勇者様から離れた直後、お父様が座席から立ち上がった。

「今宵は我が娘の婚約パーティーを踏まえた舞踏会になる。
最後まで出席願いたい。」

会場から拍手が巻き起こる。

見れば、お母様はレースのハンカチを目元に押し当てていた。

有無も是が非もなく、私は勇者様と結婚するみたいだった。

でも、嫌じゃなかった。

何より優しそうで、戦いばかりを好みそうな方じゃなかったから私は結婚しても良いと思っていた。

そう思っていたら、自然に笑みがこぼれた。

舞踏会を楽しみながら、伯父様や伯母様から沢山のお祝いの言葉をもたらった。

何だか、すごく嬉しくて。

舞い上がっていたら、何だか疲れてしまった。

私は伯父様や伯母様にお辞儀をして、少し休もうと自分の部屋へ向

かった。

パーティーは楽しいけれど、疲れてしまう。

幾つか階段を上り、部屋の前で立ち止まり、ドアノブを回した。

部屋に入ってドアを閉め、ベッドに座り込もうと振り返ると、そこには誰かが先に座っていた。

* t h r e e t i m e s *

その人は、私に気付くとベッドから立ち上がった。

髪の毛の長い、男の人だった。

私は対して恐怖を感じなかった。

「こんにちは。」

「…こんばんは。」

少し笑顔を浮かべて挨拶する。

あ、そう言えばもう”こんばんは”の時間だったなあ……。

私がそんなことを思っていると、男の人が近付いてきた。

「私は魔王です。」

そして、さらりとそう言った。

私はポカンとしてしまう。

自分を『魔王だ』なんて、酔っ払ったお父様でも言わないのに。

それにその人は、私の思い浮かべていた魔王とはかけ離れた姿をしていた。

長い髪に、優男を崩したような風体。

「……魔王つて、沢山頭が生えてたり、腕がいっぱいあったりするんじゃないの？」

「……正直、そんな姿になるのはいやですね……。」

疑問をぶつけると、その人は苦笑して答えた。

それに、魔王様は勇者様に倒されたんじゃないの？

その人は私の意志を汲み取ったのか、言った。

「……では、その人が倒されたのは魔王ではなかったのでしょうか……
現に魔王は此処にいますから。」

……へえ……

じゃあ、この人は魔王様なのね。

私は適当に理解しておいた。

だって、まだこの人が魔王だという証拠がないから。

「……それで、王女様。本題なのですが……。」
「え？」

魔王様は、不意に声を潜めた。

「私に、さらわれて頂けませんか？」

* f o u r t i m e s *

私はまたポカンとしてしまう。

『さらわれて』、なんてお願いされたのは初めてだった。

…というより、『さらわれて』なんてお願いされたのは私くらいじゃないのかな？

答えを返せずにいると、魔王様は言った。

「別に、深い意味はありません。

…ただ…。」

そうして、口ごもってしまふ。

勇者様といい魔王様といい、どちらも”らしく”ない気がする。

そういう私も、”らしく”ないのだけだ。

「…私は、魔王を倒したという勇者と戦ってみたいのです。」

……あ、なるほど…。

私は何となく理解した。

「勝手な考えで悪いのですが、王女様をさらえば必ず勇者は王女様を助けにくるものでしょう?」

うん。

…ってことは、私は困なんだね。

「…悪い言い方をするなら困ですね。」

魔王様はすまなさそうに言う。

私は、別にさらわれても良かった。

退屈だったし（疲れていたけど）、何より魔王様と勇者様が戦うのも面白そうだし、それで勇者様が勝てば、強さの照明にもなるものね。

私は、魔王様に向き直った。

「…判りました。」

「良いのですか？」

「うん。私も、戦いを見てみたいから…」

魔王様は、黙ってうなずいた。

「…ではまず、私の城に向かいますよう。」

そうだね。

…ってというか、魔王様のお城って此处からどれだけ遠いのかな？

* f i v e t i m e s *

私は、翼を羽ばたかせている魔王様に訪ねてみた。

「…その…お城って、遠いんですか？」

「いえ。遠いと言えば遠いですし、近いと言えば近いです。」

よく判らない返答をされて、私は質問を変えた。

「えっと…どうやってお城に向かうんですか？」

馬車とかで行くのかな？

私はそんなふうに思っていた。

「…いえ、私が飛んでいきます。」

へえ、魔王様が飛んでいくのね。

だからさっきから翼を羽ばたかせていたんだ…。

…じゃなくて。

魔王様は飛べるけど、私はどうするの？

「…どうすれば良いのです。」

わっ…！

私の体が宙に浮く。

え、これって…お姫様抱っこ…？

「このまま飛んでいこうと思うのですが……怖いでしょうか？」

ううん、大丈夫。

このまま飛んでいくなんて面白そう。

私はわくわくしていた。

魔王様は窓の鍵を開けて、窓を開けた。

開いた窓から、冷たい夜風が吹き込んで、私と魔王様の髪を舞わせた。

「……………では。」

魔王様の体が窓を通過して、重力を全く無視してふわりと宙に浮いた。

すいい。

魔王様はただ私を抱いて、翼は一定のタイミングで羽ばたいている。下を見れば、明かりやランプで飾り付けられた城下町が広がっていた。

きれい……………。

こんなふうに、真上から町を見たのは初めてで、感動してしまった。

「怖くはないでしょうか？」

ふと、私を気にしたのか魔王様が口を開いた。

「あ、大丈夫です。」

私は大して怖くなかったから、答えた。

「それは良かった。もし王女様を怖がらせているのではと、心配でした。」

心配させて、ごめんなさい。

でも、私は高い所は好きだから大丈夫。

「良かったです。」

王女様を怖がらせてなくて。」

そうして、安心したみたいに笑う。

…なんか魔王様なのに、優しいな…。

* s i x t i m e s *

私は、しばらく眼下に広がる世界をただ見つめていた。

それから、何か会話が欲しくて言った。

「…あの。」

「はい？」

魔王様は私へ目を向けて言う。

先ほどから胸につつかえていた疑問を口にする。

「…魔王様の住んでいるお城って、やっぱり不気味で、血まみれで、骸骨や死体が山積みだったりするんですか？」

魔王様は私の質問に対して、

「…正直言うと、そんな城には住みたくないですね…」

と苦笑いして答えた。

私は、少し驚いていた。

「……でも、私も一人暮らしですから、あまり綺麗な城だとは言えないのですが。」

そうなんだ…。

家来とかはいないんだ。

イメージしていたのと全然違って、私は本当にこの人は魔王なんだろうかと思う。

ただ羽とかが生えてるだけで、一般の人間と何も変わらないし、魔王らしい威厳だってない。

どちらかというなら、優男に羽をつけたらこうなった、そう言った方が当たっている。

私は思いながら、また下に広がる世界をただ眺めた。

そういえば、もうだいぶ飛んでいる気がするけれど、一向にお城と呼べそうな物がない。

まだなのかな？

心地いい夜風や綺麗な夜景にも飽きて、時間的に私は眠たくなってきた。

「…王女様？大丈夫ですか？」

…あ、いけないいけない。

お城につくまでは、起きてなくちゃ。

「……眠くなられましたか？」

では、少し急ぎますが…構いませんか？」

急いでくれるの？
それなら目も覚めるかも。
やってみて。

「……はい。」

魔王様は、いったん空中で静止して、翼に力をためた（ように見えた。）。

それから、一気に翼を羽ばたかせる。

わあ、早い。

でも逆に、夜風が冷たい。
寒いなあ…。

でもこれ以上の文句は言えない。

私がい慢していると、というよりも、あんまり我慢しなかったんだけど、魔王様が言った。

「つきましたよ。」

え、もう？

私は実感が沸かず、魔王様の腕の中で縮めていた体を伸ばした。

「少し綺麗だとは言い難いですが…
ここが私の城です。」

* s e v e n t i m e s *

ほえー……。

私の感想はそんな感じ。

確かに大きいけど、全体的にボロボロだし、挙げ句の果てにツタが巻き付いている。

それでも、嫌いにはならなかった。

潔癖では無いせいで、大してボロボロだとかに興味が向かなかったただけだ。

「それでは、城の中を案内………しないでおきましょう。王女様もお疲れのご様子ですから。」

うん。

疲れたわけじゃないけど、とても眠たかったの。

城の中も見てみたいけど、今は素直に体を休めるべきだと思った。

魔王様は、城の一番上の部屋の窓へ飛び上がり、窓を開けて私を床に下ろした。

「シャワー室は、この下の階にありますから、さっぱりしてらしてはいかがでしょう?」

そうだね、そうしよう。

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

私はそう答えて、階段を降りた。
シャワー室らしき部屋を見つけて、中に入る。

ドレスがしわにならないようにたたんで棚の上に置き、私はシャワー室の戸を開けた。

シャワー室はとても綺麗だった。

大きな風呂桶には桃色の泡を浮かべたお湯が張ってあったし、少量のバラが浮かべてあった。

私はゆったりお風呂を楽しんだ。

魔王様はいつも、こんな広いお風呂に一人きりなのかな？

結婚とかしないのかな……

見た目はまだ若そうだけど、奥様が居ても変には思えない。
それに優しいし、好感を持たれたりしないんだらうか…。

私は、泡が浮かんだお湯を手で掬った。

指の間から、お湯が零れ落ちていく。

私はただ、それを眺めていた。

全部零れ落ちたら、またお湯を掬って、また零れていくのを見ていく。

私は、ただ無情にそれを繰り返す。

そういえば、私の服はどうするんだろう。

着替えなんてもちろん持ってきてないし……。

私は、ばしゃんとお湯から上がった。

もう少しお風呂に浸かっていたかったのだけど、魔王様も入るんだろっし、長く入っているのは迷惑だろう。

そう思いながら、私は用意されていたタオルで身体を拭いた。

……使って良かったのかな？

それから、丁寧にたたまれていたネグリジエに着替える。

「……………ふう……………」

軽く息を付いて、シャワー室から出た。

薄い灯りに照らされた廊下が階段までずっと続いている。

階段にたどり着くまでに、何度か曲がり角があるのも目に付いた。

「…………………………」

不意に、私は探索したいという好奇心に駆られた。

…疲れたけど、ちょっとくらいは見てみよう。

私はそう決めて、薄暗い廊下を歩き始めた。

* e i g h t t i m e s *

冷たい床を、裸足の足がこする。

壁と壁との間隔が狭いせいで、その足音は大きく廊下に響いた。

裸足の足に、冷たい感触を伝える埃っぽい床。

「……………」

掃除しないのかな？

そういえば一人暮らしって言ってたっけ……。

こんな広いお城の中を、さすがに1人じゃ掃除できないよね。

よし、少しでも綺麗にしてみよう。

好奇心は別の方に向いた。

私は、箒やちりとりが無いが、辺りを見回したけれど、そんな物は見当たらない。

「…王女様？何をしてらっしゃるのですか？」

不意に聞こえたその声に、私は飛び上がりそうになった。

振り向くと、燭台を持った魔王様が立っていた。

「迷われたのですか？」

心配そうに聞かれて、私は答える。

「それもあるんですけど……掃除したいなって思ってた。」

私の答えに、魔王様はちょっと驚いた顔をした。

「王女様にはわざわざ来ていただいたのですから、そんなことをしていただく必要はありませんよ。」

言われて、私はうつむく。

魔王様が慌てて言い直した。

「それでも……私のような者に、お優しい気遣いをありがとうございます。」

私はまたびっくりした。

自分のことをけなす魔王様がいるなんて思いもしなかった。

やっぱりこの人（人じゃないけれど）は、魔王としてのプライドが無いような気がした。

「それに……王女様はお疲れのご様子ですから、今宵はもうお休みになって下さい。」

……うん。

そうしようかな。

私は魔王様に連れられて、お城の一番上の階の部屋に入った。

「すみません。この部屋は私が使っているのですが、この部屋くらいしか綺麗な部屋が無いのです。」

そうなんだ。

ありがとう…。

…じゃなかった。

私がここで寝たら、魔王様の寝る場所は無くなってしまっんじゃないのかな？

「部屋は他にもたくさんありますから。それよりも…もうお休みください。」

いろいろお世話になっちゃった。

魔王様は部屋を出て行った。

私は、ベッドに体を横たえた。

すぐに眠気に襲われる。

ふと、思った。

もし勇者様が魔王様に負けたら、私は魔王様と結婚するのかな？

その可能性もあり得るんだけど、お父様が絶対心配なさるよね…。

答えに行き着く前に、私は眠ってしまった。

明日、勇者様が来ることも知らずに。

* n i g h t t i m e s *

眩しい光が、顔に当たった。

私は沼のように深い眠りから、一気に目覚めた。

「ん……」

部屋のカーテンがずれて、朝日が部屋の中に侵入してくる。

私は目を開けて、かけ布団を押しつけて、体を起こした。

「……………」

起きたばかりで微妙に焦点のあわない目で辺りを見回す。

すぐ傍の椅子に、魔王様が座ったまま眠っていた。

今にも前のめりに倒れそうなんだけど…

私は、壁に掛けられた時計に目をやった。

「!？」

その瞬間、完全に眠気が飛んだ。

時計の大きい針は12時を、小さい針は6時の辺りを示していた。

ちょうど12時半だということを、時計は示していた。

いけない。

お昼頃まで眠ってしまった。

早く服を着替えて朝ご飯にしなくちゃ。

私はベッドから降りて、近くに用意されていたドレスに着替えた。

たぶん、また魔王様が用意しておいてくれたんだ。

私は厨房を探すことにした。

太陽の光が窓を通して、お城の床に模様を描く。

私は、何度か曲がり角を曲がって、厨房らしき部屋にたどり着いた。キッチンや冷蔵庫があるから、きっと厨房は此処だろう。

いつもはお料理なんかしないんだけど、小さい頃に教えてもらって作っていた時期があったから、少々のお料理はできる。

特に、プレーンオムレツとフレンチトーストには自信がある。よーし、メニューはそれにしよう。

あとは付け合わせで、ベーコンやサラダを付ければいい。

私は決めて、冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中には、意外に普通の食材しかなかった。

人間の目玉や臓器とかが入っているんじゃないかと思っていたのに、卵を2つと、ベーコン、生野菜を取り出す。

卵を割って、牛乳と混ぜて、フレンチトーストの材料を揃える。

冷蔵庫に入っていたフランスパンを薄切りにして、その中に浸した。それから、お皿にサラダを盛りつけておく。

フライパンを温めて油を引き、ベーコンを焼いた。

ベーコンが焼けたらフライパンを一度洗って、また油を引く。

冷蔵庫からバターを出して、フライパンに乗せて溶き卵を乗っけて焼く。

プレーンオムレツとベーコンが出来上がったら、お皿に乗せる。

そして、浸しておいたパンをフライパンで焼いて、朝ご飯の出来上がり。

二枚のお皿を手にとって、私は部屋に戻った。

魔王様はまだ眠ってるみたいだった。

時間があるから、ミックスジュースも用意した。

そうしていると、ご飯の匂いで目が覚めたのか、魔王様が椅子から立ち上がった。

「おはようございます。…おや、この料理は……？」

えへへ、すごいでしょ。

私を作ったんだよ。

「ありがとうございます。…早速いただくとしましよう。」

魔王様の言葉に、私は思い出した。

…味見してない!!

どうしよう。

久しぶりに作ったから、味が薄すぎたり濃すぎたりするかも……。

私の心情なんか知らずに、魔王様はテーブル脇の椅子に座って、食事の用意をしていた。

* t e n t i m e s *

魔王様は、プレーンオムレツをナイフで切り分ける。

切り分けたプレーンオムレツを口にする魔王様を、私はそこに釘付けされたようにただ見つめていた。

「お上手ですね。とても美味しいです。」

良かった…。

私はホツと息をついて、自分のオムレツを切り分けて食べた。

不味いなんて言われたらどうしようと、それだけが心配だった。

だから美味しいといわれて、私は心の中が軽くなった。

魔王様はプレーンオムレツとフレンチトースト、付け合わせは食べてくれたのに、何故かミックスジュースにだけ手をつけなかった。

どうしたんだろう？

美味しそうに見えないんだろうか。

それとも、苦手…とか？

「王女様、失礼ですが…ゆっくりお食事を楽しんではいられないよ

うですよ。」

ふと、魔王様が言った。

魔王様は近くの窓から外の様子をうかがっていた。

「いよいよ勇者様がいらっしやっただようですね。」

わあ、本当だ。

やっと、魔王様と勇者様の対決が見れるんだね。

楽しみだな。

…でも、これで勇者様が勝ったら、ここは決まり文句だよな？

私は城に帰って、めでたく勇者様と結婚……。

嫌ではないんだけど……。

私のためだけに、2人が傷つけあうのは嫌だな…。

後悔しても遅いんだけど……。

そうしている間に、勇者様は私たちが居る部屋まで辿り着いた。

「やっと見つけたぞ、魔王！」

「女王様を返せ……って、そこに居られましたか。」

勇者様は威勢良く魔王様に言ったんだけど、私がお場にいたから言葉を切った。

「よくきましたね、勇者様。

さぞお疲れでしょう。

「コレでも飲んでください。」

言いながら、魔王様が差し出しているのは私が作ったミックスジュース。

「そうだよね。」

私は一瞬でたどりついたけど、歩くとなるとかなり遠くに達しない。

でも、どうして私のミックスジュースを……？

「魔王の作った飲み物など口に出来ない。毒入りかもしれないし。」

え、ひつどい。

「それ私が作ったのに。」

「え……？コレ、王女様が直々にお作りに……？」

「それならいただきましょう。」

「そこでようやく、魔王様の目的を理解した。」

魔王様は、ここまで歩いてスタミナ切れの勇者様では戦っても強さの証明にはならないと思ったんだろう。

やっぱり、優しいな…。

「王女様、そろそろ戦いが始まります。約束通り、上の階に向かってください。よく見えるはずですから……」

うん、ありがとう。

私は、そそくさとその場を立ち去った。

いよいよ、魔王様と勇者様の勝負が始まる。

* e l e v e n t i m e s *

「……………」

私はとりあえず上の階にあがろうとして、気づいた。

この部屋が、この城で一番上にある部屋なのに、これ以上に階があるわけがなかった。

「王女様、申し訳ありません。」

そこにあるスイッチをお押し願えますか？」

魔王様は戦いの準備をしながら言った。

私は言われたとおりに、部屋の壁につけられたスイッチを押した。

スイッチは小さく光って、それから壁にヒビが入り始めた。

「え……………」

私も勇者様もぽかんとしてそれを見ていた。

ヒビが広がり、壁に穴が開いた。

穴の向こうには、隠し階段ではなく隠し部屋があった。

「狭い上にあまり綺麗ではなくてすみません。」

魔王様は、私が充分通れるくらいまで穴を広げて、言った。

「ここで、見ていてください。
危険だと思いましたが合図しますので、奥の階段から外へ逃げてく
ださい。」

…そんなに危険な勝負をするつもりなのかな…

だんだん心配になりながら、それでも今更断れず、私は隠し部屋の
中へ入り、用意されていた椅子に座った。

「では……始めましょうか？」

魔王様は、勇者様に向き直った。

勇者様は既に剣を抜いていた。

勇者様はもう一言も口を聞かず、ただ魔王様へ目を向けていた。

「…失礼ですが、他に兵士などはお連れにならなかったのですか？」

「確かに失礼だな。私は魔王を倒したんだ。」

魔王もどきに負けるはずがない。」

…強気だな、勇者様……

魔王様は、ようやく魔王らしい態度を見せ始めていた。

よくアニメとかで見る短気で怒りっぱいわけじゃなくて、王らしい
威厳がある。

魔王もどきとか言われていても、優雅な微笑みを崩さない。

…強者の証なのかな…

「では、始めましょう。
くれぐれも王女様に危害を加えないように……」

魔王様が言つて、剣を抜いた。

勇者様は間髪を入れずに動いた。

敏捷な動きで、素早く魔王様に近寄る。

魔王様はそれに見合うだけの卓抜した運動神経で、勇者様の攻撃を難なく交わしていく。

「……………」

私は視線をそこに釘付けにされたように、二人を見ていた。

それは戦いというよりも、舞いを舞っているようだった。

…この勝負に終わりなんて来るのかな？

私は魔王様と勇者様の戦いに少し酔いながら、ふと思った。

* t w e l v e t i m e s * (前書き)

久しぶりに小説投稿します、黒羽です。

覚えていらっしやいますか？

私、黒羽はまだ学生ゆえに受験があり、全く小説投稿が出来ませんでした。

長らくの放置、すみませんでした。

これからも引き続きよろしくお願いいたします。

* t w e l v e t i m e s *

それでも、戦いに勝敗は付き物で、直に勝利が見え始めた。

勇者様の方が、魔王様の動きに着いて行けなくなりはじめていた。

切り返す剣を振るう力も、跳ね返って魔王様の剣を受け止める力も、完全に下回りはじめていて。

見えて気が気でなかった。

そう言えば、こういうのって、相手を殺したりしないと勝てないのかな？

…そうゆうのって、嫌だな。

「…あの、勇者様？」

私はとっさに勇者様に話しかけてしまった。

「はい、何でしょう？」

勇者様は戦いの手を止めて私を見つめた。

「もう勝負は見えているから……」

終わりに、しませんか？」

「えっ？」

私の言葉に、勇者様も魔王様も剣を下ろした。

勇者様は、たぶん私のお父様に命令されて助けに来てくれたのだらうけど……

私は、2人（魔王様は人じゃないけど）に命がけで戦ってほしくない。

「でも……王女様はお城に帰りたいでしょ？」

んー……帰りたくないっていうと、嘘になるんだけど……

あ、そうだ。

こんな方法どうかな？

私は良い考えを思いついて、2人に提案することにした。

* t h i r t e e n t i m e s *

「魔王様、紙とペンを貸してくれますか？」

「え？紙と……ペンですか？」

私のお願いに、魔王様はぽかんとした。

それはそうだよな。

「勇者様、剣を貸していただけませんか」

「はっ……？」

勇者様もぽかんとしながら、危ないからと剣を鞘ごと手渡してくれた。

これならきつと、お母様もお父様も判ってくれると思う。

魔王様に借りたペンで紙にさらさらつと手紙を書く。

きちんと拝啓で始めて敬具で締めた。

それから、勇者様に借りた剣で髪を切る。

それを結んで、手紙にはさんで、勇者様に差し出した。

「これを、お母様とお父様に渡してください」

「えっ………お、王女様、まさか……？」

うん、そのまさかだよ。

私、魔王様と一緒に暮らします。

私は呆然とする勇者様に剣を返した。

ごめんね、助けに来てもらったのに無碍に追い返すような展開になって。

でも私は、魔王様と歩んでいきたいから。

「魔王様……えっと、その。」

勝手なことを言っちゃった。

ここまで段取りして、髪まで切っちゃった後に断られたらどうしよう？

一気に不安になった私の肩に、魔王様の温かい手が乗せられた。

「…本当にそれで良いのですか？」

そうして向けられる、視線。

魔王様の赤い瞳と視線が合致する。

もう覚悟なんて出来ていた。

というより、覚悟がないなら髪なんか切らないよ。

「……はい」

私がつなずいて、魔王様もつなずいた。

勇者様は全てを悟ってくれたみたいで、それ以上は何も言わなかった。

「それでは、お手紙は必ず国王陛下へ届けます。」

「はい、ありがとうございます」

勇者様は丁寧に手紙をポケットにたたんで入れると、魔王様に手を差し伸べた。

「素晴らしい戦いだった。またいつか剣を交えるときが来ると良いな」

「私もです。城にはいつでも遊びに来てください。私も王女様も楽しみにしていますから」

魔王様が勇者様の手を握る。

終戦の挨拶もそこそこに、勇者様はマントを翻して出て行った。

あとに残った私は、お父様やお母様への感謝を思い出して涙ぐみそうになって、涙を堪えた。

魔王様を振り返って、笑う。

「よろしくお願ひしますね」

「こちらこそ。」

まだ魔王様のこと、知らないことばかりだから。

暮らしていく中で、魔王様のことたくさん教えてね。

魔王様も私のことを詳しくは知らないだろうから、ちゃんと私のことも知ってね？

e
n
d
.

* t h i r t e e n t i m e s * (後書き)

今まで「でいあ・m y・プリンセス」を読んできださっていた皆様へ、心からの感謝を込めて……

こんにちは、
受験や結果発表や入学式や、となかなか更新できない日々が続いて、もしかしたら「でいあ・m y・プリンセス」が忘れ去られているだろうなと思いつつも、今日、ようやく終わらせることが出来ました。

これからも

私、黒羽は小説を書いていくつもりです。

どうかこれからも、

黒羽の成長を温かく見守ってくださればと思います。

皆様の暖かなコメントにいつも救われています。

本当にありがとうございます。

それでは、

長らく更新不在で本当に申し訳ありませんでした、
また小説を書いていきます。

ありがとうございました！

f r o m · 黒羽

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1984p/>

でいあ・my・プリンセス

2011年5月9日19時20分発行